

人間ソーロウ管見(4)

—White Indian I—

尾 形 敏 彦

(I)

愛とは、日の光、波の囁きだと感じた自然と遊ぶ人ソーロウは強くアメリカ・インディアンにひかれた。文明社会に生活しながらインディアンのように生きたいとソーロウが望んだのは、自然を愛したのが主な理由ではあったが、彼の浪漫的原始主義、インディアン差別に対する反感、物質文明否定のためでもあった。非常な読書家ソーロウが読んだ書物から飽きることなく写したインディアンに関する多数の記事から彼は何を学んだのであろうか。

インディアンについては一般に相反する見方がある。第1は知恵も技術もない哀れな野蛮人という見方であり、第2は白人よりも正義感の強い自然人という見方である。アメリカ人の大部分は前者の見方を取り、インディアンを森や海岸を跳び回って大地を汚す野蛮人だと考えていた。後者の見方を取るソーロウのような少数者はインディアンの自然観、芸術観、宗教観、生活態度に関心をもっていた。ほとんどすべてのインディアン研究者は白人優位という先入観をもち、白人宣教師は宗教を教えてやるという輕蔑的態度を抱いていた。いわゆる博愛主義者は野蛮人を文明化してやりたいと自惚れていた。こういう連中とは反対に自分をインディアン化しようとする少数の芸術家もあったことは想像にかたくない。先進国か後進国か、賢人か愚人かというように2分して考えることは、時には明快有効である。インディアンが象徴するものは自然と野性(savagism: savageの語源はラテン語の woods)である。ウェブスターによれば、野性とは非文明状態のことである。ソーロウの場合には、彼の初期の日記に見られるように、野性に憧れてインディアンの実態を知るために、その伝説

や遺跡を探索したらしい。兄ジョンは文明的村落生活にやっと同調できる程度の変り者であった。この兄よりもソーロウはインディアンのように森に憧れ、村落生活からは逃避したいというほどの変人であった。文明とは人工が与える悪影響だとソーロウは考え、自然のほうが人工よりも高度の教育を与えると判断した。人工は個人の周囲を壁で囲むから天空を見ることができず、雨風にも無縁になるとソーロウは考えた。インディアンはすぐれた視力をもつから遠い未来を見ることができるとソーロウは言った。自然生活は文明生活よりもすぐれていると彼は日記に書いている。

Their memory is in harmony with the russet hue of the fall of the year.

For the Indian there is no safety but in the plow. If he would not be pushed into the Pacific, he must seize hold of a plow-tail and let go his bow and arrow, his fish-spear and rifle. This the only Christianity that will save him.

His fate says sternly to him, "Forsake the hunter's life and enter into the agricultural, the second, state of man. Root yourselves a little deeper in the soil, if you would continue to be the occupants of the country." But I confess I have no little sympathy with the Indians and hunter men. They seem to me a distinct and equally respectable people, born to wander and to hunt, and not to be inoculated with the twilight civilization of the white man.

Father Le Jeune, a French missionary, affirmed "that the Indians were superior in intellect to the French peasantry of that time," and advised "that laborers should be sent from France in order to work for the Indians."

The Indian population within the present boundaries of New Hampshire, Massachusetts, Rhode Island, and Connecticut has been estimated not to have exceeded 40,000 "before the epidemic disease which preceded the landing of the Pilgrims," and it was far more dense here than elsewhere; yet they had no more land than they wanted. The present white population is more than 1,500,000 and two thirds of the land is unimproved

The Indian, perchance, has not made up his mind to some things which the white man has consented to; he has not, in all respects, stooped so low;

and hence, though he too loves food and warmth, he draws his tattered blanket about him and follows his fathers, rather than barter his birth-right. He dies, and no doubt his Genius judges well for him. But he is not worsted in the fight; he is not destroyed. He only migrates beyond the Pacific to more spacious and happier hunting-grounds.

A race of hunters can never withstand the inroads of a race of husbandmen. The latter burrow in the night into their country and undermine them; and [even] if the hunter is brave enough to resist, his game is timid and has already fled. The rifle alone would never exterminate it, but the plow is a more fatal weapon; it wins the country inch by inch and holds all it gets.

What detained the Cherokees so long was the 2923 plows which that people possessed; and if they had grasped their handles more firmly, they would never have been driven beyond the Mississippi. No sense of justice will ever restrain the farmer from plowing up the land which is only hunted over by his neighbors. No hunting-field was ever well fenced and surveyed and its bounds accurately marked, unless it were an English park. It is a property not held by the hunter so much as by the game which roams it, and was never well secured by warranty deeds. The farmer in his treaties says only, or means only, "So far will I plow this summer," for he has not seed corn enough to plant more; but every summer the seed is grown which plants a new strip of the forest.

The African will survive, for he is docile, and is patiently learning his trade and dancing at his labor; but the Indian does not often dance, unless it be the war dance.⁽¹⁾

ソーロウはインディアンを狩猟人で耕作法を知らない者だと考えていた。たとえば、チェロキー族 (Cherokees) が堅実な農民であったなら救われたであろうと誤解した。チェロキー族大移動をヴァン・ビューレン (Van Buren) 大統領が命令した時、エマスンは抗議文を送った (1838. 4.) が、ソーロウは何もしなかった。ソーロウの社会的影響力が小さかったからでもあったが、チェロキー族は専業狩猟者だから彼等に対する土地論争は無意味だとソーロウが考えたからであった。ソーロウは狩猟人インディアンの前途には栄光ある絶滅が

あるのみだという幻想に捕われていた。しかし、実際にはインディアンは狩猟兼農耕民であった。誤解したソーロウがインディアンを賛美したのは、彼等のイメージに伴う悲劇的な英雄像に感動したからであった。ソーロウはインディアンの戦士を特別に賛美した。彼にとって観念としてのインディアンは自己信頼感に溢れる北アメリカ大陸の守護神であった。しかし、このインディアン像は白人の征服者、伝道師、行商人などが彼等について書いたものからソーロウが借用した姿にすぎなかった。時代がたつと、守護神は絵画的インディアンに生まれ変わった。専門のインディアン研究者の意見さえもかなりあいまいである。野性を非文明と見なした点ではすべての研究者や画家達が一致していたが、野性を悪徳と見るか美德と見るかによって彼等の作品には賛否両論があった。ソーロウの父親は物静かな文明歓迎人であったが、ソーロウにとっての理想的父親は彼が偶像化したインディアンの人間であった。そのために、ソーロウ兄弟は反抗心から1週間の舟遊に出発したのであった。後には兄弟の父親に対する反抗的態度は和らぎ、ソーロウも村の生活に入れるようになった。母親シンシア・ダンバー・ソーロウは逞しく社会的で奴隷制度反対運動を進めたり、出世するようにソーロウの海外旅行を促したりした。彼は母親のほうにより馴染んだようである。母親は彼のウォルデン生活の時にも何かとソーロウに暖かい目を向けていたようである。しかし、独立心をもってインディアンのように生きたいというソーロウの希望は変らなかった。

ソーロウの生涯を見ると、彼は多彩な知識のほとんどすべてを書物から得た書斎旅行者であって、自分の体験によって物を知る実際人ではなかった。ソーロウを科学的実践家と見なすのは誤解である。ウォルデン生活では、どの花がいつ咲くかとか、氷の厚さがどのくらいかというようなことをソーロウ自身で確認したことは事実だが、その行動範囲は非常に狭かったので問題にはならない。ソーロウは他人の書物やパンフレットや耳学問から驚くほど多くの知識を借用した。インディアンに関しても例外ではない。確かにメイン旅行ではインディアンについて僅かばかりの実際の知識を獲得したが、それでさえも記録や耳学問によるものが多かった。一般に考えられているのとは違って彼は教相に捕われて事相には暗かった。

文学史でアメリカ人の祖先という時には白人を指すが、歴史的にはインディアンがより古い祖先である。しかし、この両者は敵対していたからインディアンの祖先を賛美することも劣等視することも共に白人に対しては不愉快なことであった。折衷案として、インディアンの祖先を神話的巨人に祭り上げると同時に、現実のインディアンを愚劣な野蛮人だと軽蔑するのが一般的な白人の態度であった。ソーロウはこういう考え方には賛成できなかった。インディアンは彼等なりに独自の衣服や武器や住居を持っていた。伝統に固執して文明化を拒否し、学問を無視したために、酋長や魔術師の詭弁欺瞞に翻弄されてしまったとソーロウは考えた。彼等には耕作技術習得の意欲もなく、一定狩猟地の確保もしなかった。彼等は怠惰で利己的で時には残忍であった。そのためにかえて文明の悪徳に染まり易かった。勤勉とか節約とかいう美德を持たないインディアンは、白人と交際すると、飲酒に溺れ、嘘つきで強欲になった。彼等の交際相手の多くが白人の詐欺師や無頼漢であったのがこうなった主な理由である。インディアンのほうも白人は信用できない不正人だという印象を抱くようになった。

18世紀から19世紀にかけて、アメリカ西部は狩猟から農耕への転換期で、農耕は狩猟の40倍もの利益をあげていた。インディアンはこれほど有利な農耕生活専従をも拒否した。多くの白人はインディアンの純真さを認め、文化の喪失を哀れんだ。しかし、一部の白人は彼等の幼稚さ、反抗心、残忍さを非難し、滅びゆく野蛮人に対する文明人の歎声をあげた。

依然として男は狩猟に励み、女だけが農耕に従事して各種の作物を栽培していた。彼等のなかにはヨーロッパ製農機具を使用する者さえいたらしい。イロコイ族(Iroquois)は果樹園や畑を所有し、丸太小屋も建てていたと白人兵士の日記に書いてあったということである。1820年代にはインディアンは家畜、馬車、水車なども所有していたらしい。チェロキー族は学校や教会さえも所有していたと言われる。植民地時代初期の北アメリカ東部では多くのインディアンがキリスト教に改宗したが、その半数以上がコレラや天然痘で死んだらしい。また、1763年には、ペンシルヴェニアで暴力団パクストンボーイズに銃殺されたり、法廷で絞首刑にされたインディアンがいたということである。これ

らの話はインディアンが単純に白人文明を礼賛して、伝道師などの口車に乗せられた結果に違いない。金もうけ話とウィスキーが彼等の自尊心を奪った。多くの善良な白人はインディアン相手の悪徳白人の不当利益を見て見ぬふりをし、犠牲者を哀れむ様子をして見せた。いつの世でも弱者を救うということはあるまい。生き残るためには強者にならなければならない。勿論、ウィスキーに酔わないで自分の土地を固守して文明社会とは交渉しないインディアンもいた。東部のインディアンがミシシッピ河以西に移動したのは名誉を重んじるインディアンの白人に対する好意によるものであったと言われる。

インディアンを敵視しても哀れんでも、とにかく彼等に関心を抱く者を野性主義者 (savagist) と一般に呼んでいる。野性主義者のアーヴィング (Washington Irving) は馬上のインディアンを放浪の騎士に譬え、クーパー (James Fenimore Cooper) は高貴な野蛮人を巨人に祭り上げた。しかし、アーヴィングはインディアン社会の多様性を知らず、クーパーは自分を二重写しにして作品を書いた。孤独、善良で思慮深い、滅びゆくインディアンはアンカス (Uncas) やチナンクグック (Chinanchgook) であり、迷信的で残忍なインディアンはモヒカン族 (Mohicans) だと単純に興味本位でクーパーは書いた。晩年のクーパーは貴族主義者になってインディアンを嫌悪した。ウェブスターはインディアンの野性が文明人の悪徳によって墮落する以前には他人を厚遇し、友人には信頼と忠実と感謝の念を持っていたが、敵には残忍で復讐心に燃えたと言明していた。19世紀には多くの作家がインディアンについてさまざまなイメージを描いた。ソーロウは社会改革者的な一面を持っているが、本質的には自然のなかに神を見ようとし、野性に魅惑されてインディアンを追求した人であった。しかし、体力不足と経済問題から実地踏査も思うにまかせずに書物や世間話に頼らざるを得なかった。そのために彼のインディアン論は体験的ではなく信用し難い。もっとも、彼は各引用文には類似点が多すぎることに自分でも気づいていた。たとえば、インディアン滅亡に関しては、流行病が原因だという引用が多い。「我々がインディアンの町を出発して、2、3日たつと彼等が急に死にはじめた。狭い場所で多くの人が死んだ。20人ほど死んだ町もあれば、40人ほど死んだ町も、60人ほど死んだ町もあり、ある時には120人も

死んだ。町の人口から言えば非常に多くの死者であった。奇病らしく、原因も治療法も不明であった。……白人との交際がインディアンを一掃する奇病をひき起したかのようであった」というハリオットの説をソーロウは引用している。また、これとは別に、イギリスからの移民の2、3年以前にマサチューセッツのインディアンが病気で一掃されたという記事をソーロウは読んでいる。一隻のフランス船がマサチューセッツ湾に入港し、インディアンがその船を襲撃した後の話である。「やがて、『神の御手が彼等の上に重くのしかかった。死の一撃であった。インディアンは各自の家で横たわって折り重なって死んだ。動ける者は逃げ、死にかけた者は放置され、死者は埋葬の間もなく地面に寝かされた』ということである。一人だけが生き残ったということもあった。……死神はピルグリム・ファーザーズ上陸の時にも生きていたということである。ペストらしかった。この話はノース・カロライナのインディアンに関するハリオットの話に似ている。また、ヒューロン族に関するイエズス会修道士の話にも似ている」とモートンが書いていて⁽³⁾とソーロウは言う。ソーロウはイエズス会修道士の記事からも引用している。「今、広まっている病気はほうそうである。『ある理由からインディアンはここに我々が到着して以来、我々の近くにいたインディアンはほとんど病気で死んだということに気づいた。それから、我々を受け入れた町全体が全滅しかかっているということに気づいた』のでフランス人を抹殺してしまおうと決心した」というところはその引用である。(Relation, 1639—40)。しかし、病気だけではなく、白人の戦闘技術や協定破棄などもインディアン滅亡の原因だとソーロウは考えていた。

「彼等の滅亡は不節制、暴飲、麻薬、戦闘、自由性交、内部抗争などによることもあった」と牧師ロスキルからも⁽⁴⁾ソーロウは引用している。これらの文明病によってインディアンは野性を失った。また、病気の媒体として毛皮取引も一役買っていた。ソーロウはそのことについてもマッケンジーから引用している。「この取引に必要な商品は各種の粗い毛織布、大小の機械製の目の細かい毛布、武器、煙草、リンネル、粗織の敷布、糸、綱、麻紐、金物、ナイフ、鉄器、真鍮や銅製のやかん、薄い鉄板、絹や木綿のハンカチ、帽子、靴、靴下、キャラコ、プリント木綿布などである。私が話している年の毛皮の年産(18世

紀末のこと)は次の通り(概数)である。

ビーバーの皮	1 0 6 0 0 0
てんの皮	3 2 0 0 0
マスクラットの皮	1 7 0 0 0
大山猫の皮	6 0 0 0
かわうその皮	4 6 0 0
子狐の皮	4 0 0 0
狼の皮	3 8 0 0
熊の皮	2 1 0 0
ミンクの皮	1 8 0 0
うおくいきてんの皮	1 6 5 0
狐の皮	1 5 0 0
装飾された鹿皮	1 2 0 0
鹿皮	7 5 0
大鹿の皮	7 0 0
いたちの皮	6 0 0
野牛の皮	5 0 0
あらい熊の皮	1 0 0 ⁽⁶⁾

これらの数字を信用したソーロウは驚嘆した。この数字は毛皮取引の1年分の全数量なのか、マッケンジーが取引していたノースウエスト毛皮商会だけの数量なのかソーロウには分らなかった。イギリス支配のアメリカでは川の土手に皮をはがされた熊の死体ごろがっていたという話である。このような毛皮商売でイギリスのアメリカ支配が成立していた。こういうイギリスの文明病に対するソーロウの治療法は野性に帰れということであった。野性の状態にあることは世界を保護することだとソーロウは考えた。野性は西部や大森林だけではなく、村周辺の沼や林や人間のなかにも存在していると彼は言うのである。

「私は聖なる沼サンクタム・サンクトラム(神殿の聖所 sanctum sanctorum)へ踏み入る。ここには自然の力強さがある。野性の森が大地を覆い、その土は人間と樹木を助けてきた。一人の人間の健康には何エーカーもの草地が必要で

ある。……町はそこに住む有徳人によってではなく、周囲の森や沼によって救われるのだ」(“Walking”)というようなことをソーロウは書いた。ソーロウはインディアンと沼地を結び、この両者が野性をもつ少数の生き残りのもので、この両者がソーロウを復活させたと考えられる。

I had a thought in a dream last night which surprised me by its strangeness, as if it were based on an experience in a previous state of existence, and could not be entertained by my waking self. Both the thought and the language were equally novel to me, but I at once perceived it to be true and to coincide with my experience in this state.

3 P.M. — To Cliffs and Walden.

You must go forth early to see the snow on the twigs. The twigs and leaves are all bare now, and the snow half melted on the ground; where the trees are thick it has not reached the ground at all, except in the shape of water in the course of the day. But early this morning the woods presented a very different scene. The beauty and purity of new-fallen snow, lying just as it fell, on the twigs and leaves all the country over, afforded endless delight to the walker. It was a delicate and fairylike scene. But a few hours later the woods were comparatively lumpish and dirty. So, too, you must go forth very early to see a hoar frost, which is rare here; these crisped curls adorn only the forehead of the day. The air is full of low, heavy mist, almost rain. The pines, in this atmosphere and contrasted with the snow, are suddenly many degrees darker, and the oaks redder. But still the tops of the dead grass rise above the snow in the fields, and give the country a yellow or russet look. The wetter meadows are quite russet. I am surprised to see Fair Haven entirely skimmed over.

Having descended the Cliff, I go along to the Andromeda Ponds. Sportsmen have already been out with their dogs, improving this first snow to track their game. The andromeda looks somewhat redder than before, a warm reddish brown, with an edging of yellowish sedge or coarse grass about the swamp, and red rustling shrub oak hills with a white ground rising around. These swamps, resorted to by the muskrat and ducks, most remind me of the Indian.

The mist so low is clouds close to the ground, and the steam of the

engine also hugs the earth in the Cut, concealing all objects for a great distance.

Though the parents cannot determine whether the child shall be male or female, yet, methinks, it depends on them whether he shall be a worthy addition to the human family.⁽⁶⁾

しかし、この治療法は白人患者専用という欠点がある。白人は文明病治療に病氣とウィスキーと食欲と武器を土産にインディアンを訪問した。これらはインディアンにとっては死神であった。また、毛皮取引は彼等の狩猟技術と工場製品欲求心とを利用してインディアンの友人である動物を絶滅へと追いやった。意外なことは、白人とキリスト教に対して勇敢に戦ったインディアンが最も文明病に感染しやすかったということである。白人とは違って、文明病進行にインディアンは耐えられなかったので、ソーロウはインディアンの絶滅という予言を信じ、彼等は哀れにもこの世の終りに直面していると感じていた。

We survive, in one sense, in our posterity and in the continuance of our race, but when a race of men, of Indians for instance, becomes extinct, is not that the end of the world for them? Is not the world forever beginning and coming to an end, both to men and races? Suppose we were to foresee that the Saxon race to which we belong would become extinct the present winter, — disappear from the face of earth, — would it not look to us like the end, the dissolution of the world? Such is the prospect of the Indians.⁽⁷⁾

ソーロウは人間は運命によって苦難と戦うか、神秘の力に励まされて戦い抜くかのいずれかだと考えた。キリスト教や教育によっても必然的に終末を迎えざるを得ないインディアンのような人種のことを思う時、人間には本質的な前世的差別があることを疑えないとソーロウは考えた。白人の歴史は進歩の歴史であり、インディアンの歴史は旧守停滞の歴史であるとソーロウな日記に書いた。

Who can doubt that men are by a certain fate what they are, contending with unseen and unimagined difficulties, or encouraged and aided

by equally mysterious auspicious circumstances? Who can doubt this essential and innate difference between man and man, when he considers a whole race, like the Indian, inevitably and resignedly passing away in spite of our efforts to Christianize and educate them? Individuals accept their fate and live according to it, as the Indian does. Everybody notices that the Indian retains his habits wonderfully, — is still the same man that the discoverers found. The fact is, the history of the white man is a history of improvement, that of the red man a history of fixed habits of stagnation.⁽⁸⁾

この日、ソーロウは瞑想に耽っているうちに、白人とインディアンとの関係は犬と狐の関係だと気づいた。犬の吠え声は清澄で音楽的だが、狐の鳴き声はインディアン⁽⁹⁾の重苦しく不明瞭な声に似て耳障りだと思った。狐とインディアンは進歩せずに犬と白人におびやかされているとソーロウは思った。彼は運命に流されるインディアンを哀れみはしたが、彼等の欠点については同情しなかった。しかし、宗教や教育の強制をインディアンが拒否することについては非難しなかった。とにかく、ソーロウ自身がインディアンとの直接交際によって得た知識は乏しかった。彼が書いたものは主観的、想像的であったからインディアン論としてはあまり信頼できない。

(II)

ソーロウのインディアン論については第一に『一週間』 (*A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, 1849) があげられる。『一週間』のなかでソーロウはインディアンに関して、ある程度言及している。とくに、インディアンと白人との宗教、戦闘、商売、社交などにソーロウは注目している。しかし、エマソンのように多くの例証を収集するという手堅さがなく、身体虚弱で読書三昧のソーロウには簡単に他人の意見に頼る傾向があった。この点、ソーロウのほうがエマソンよりも主観的であり文学的であったと言えるかも知れない。偶然であろうが、『一週間』の8章構成はエマソンの『自然論』に類似している。さらに、外形だけではなく、内容的にも次元が次第に高くなるように

配列されている。『一週間』ではインディアンに関する記述が多いだけでなく、自然は神の顕現だとされている。自然を神格化している宗教は多い。日本でも古代の渡来民、その多くは中国や朝鮮半島からのものだが、そのもたらした宗教思想が単立したり日本古来の神道類と融合したりして、日本の各宗教に発展した。それらのなかでも、奈良時代以後、とくに修験道が自然のなかに神を見る代表的なものであろう。インディアンを指導してきた魔術師と道教の仙人や修験道の行者を比較することは興味深いことである。

『一週間』に対する批評は大別して二分される。第一は、この作品は思想的旅行記で統一性がないという批判である。ローウェル (James Russell Lowell) にはじまり、スティブンスン (Robert Louis Stevenson)、キャンビー (Henry S. Canby)、クルーチ (Joseph Wood Krutch) などの批判である。第二は、この反対に有機的統一性をもつ秀作だという評価である。マシーセン (F. O. Matthiessen) にはじまり、シャーマン・ポール (Sherman Paul)、マッキントッシュ (James McIntosh) などの評価である。ソーロウを科学的歴史家と見るか、文人と見るかの相違である。

22歳のソーロウは兄ジョンと長さ15フィートの手作り平底舟でコンコード河の舟着場から出発 (1839. 8. 31. 土) した。メリマック河へ入り、野営しながら前進した。9月5日に舟をつないで徒歩前進した。6日にはプリマス (Plymouth) まで40マイルを馬車旅行し、それから徒歩でソーントン (Thornton) に到着した。以後4日間徒歩旅行をして、10日にワシントン山 (Mt. Washington, 1919m) に登り、馬車でコンウェイ (Conway) まで戻った。11日にも馬車を利用し、12日朝に舟の係留地点に着き帰途についた。その夜は河の中洲で野営した。13日には約50マイルを漕ぎ、その夜、2週間の舟旅を終えてコンコードへ帰着した。旅行記を書くつもりはなかったが兄の急死 (1842. 1. 11. 破傷風) によって出版を決意した。1842年から44年までの日記から材料を集め、これを書くためにウォルデン生活をはじめ (1845. 7. 4), 1846年に草稿の大部分をまとめた。これに同年秋のメイン旅行記170ページを加え、翌47年に草稿を完成した。翌年「友情論」を入れ、さらに彼自身の投獄体験を「日曜日」の章に加えた。そして、1849年2月に完成原稿を校了し、同年5月30日にマンロ

一社 (James Monroe) から出版 (1000部) した。一般に出版してみないと分らないことだが、『一週間』はソーロウの期待とは違って売れなかった。これは旅行談を45回も中断して随筆を挿んでいる。旅行記は420ページのなかの131ページにすぎない。このために、ローウェルは「静かに河旅行を楽しんでいる時に読者を水中に振り落とすようなものだ」と批判した。これは有名な話である。しかし、ソーロウは日記、講演、覚え書きなどから適当に引用を続けて『一週間』を随筆集として完成している。この点にソーロウの目的があったと思われる。ビューアル (Lawrence Buell) は超絶主義美学の基準では、こういう点が長所だと言った。ソーロウはいつものように時間的正確などを問題にせず内容重視した。

ニュー・ハンプシャー州北部のホワイト山脈 (The White Mountains) の最高峰ワシントン山登頂に成功し、メリマック河の水源を探検したことはソーロウにとっては楽しい真理の探求であった。真理に迫ろうとする彼の精神は徹底的に自然研究に憧れ、神の世界に没入することを彼に迫った。この自然と精神の旅行をソーロウは『一週間』の扉の詩によって象徴した。

Where'er thou sail'st who sailed with me,
Though now thou climbest loftier mounts,
And fairer rivers dost ascend,
Be thou my Muse, my Brother —.

I am bound, I am bound, for a distant shore,
By a lonely isle, by a far Azore,
There it is, there it is, the treasure I seek,
On the barren sands of a desolate creek.

I sailed up a river with a pleasant wind,
New lands, new people, and new thoughts to find;
Many fair reaches and headlands appeared,
And many dangers were there to be feared;
But when I remember where I have been,
And the fair landscapes that I have seen,

Thou seemest the only permanent shore,
The cape never rounded, nor wandered o'er.⁽⁹⁾

この詩の第2聯は『般若心経』の呪の文句に類似しているように私は思う。
試みに書けば、第2聯の大意は次のようになるであろう。

私は行く 私は行く 遙か遠い岸边へ
孤島へ 遙かなアゾレス島へ
そこにある そこにある 求める宝が
私の人生のわびしい小川の不毛の砂地に。

ソーロウがポルトガル西方の大西洋上に浮かぶと想像したアゾレス島は彼が求めた真理の国（極楽）である。他方、『般若心経』のほうは、顕教風に明快に述べてきて、密教の呪の文句で締めくくった。最後の真言を漢語訳せずにサンスクリットの当て読みをして三蔵法師は終りにした。中村元氏によるとこの真言は文法的には正しいサンスクリットではなく俗語の用法であり、各種の訳ができるらしい。この偈文を私はこう読んでいる。

私は悟った 私は悟った
他人にも悟らせた
悟りと実践に人々は到達した
私の悟りの道は成就された
喜ばしいことだ。

釈尊は臨終に「他人に頼るな。法に頼れ。他人に救いを求めるな。」と言われたようだ。これはエマスの Self-Reliance に通じるところであり、ソーロウの精神的なより所と一致するようである。勿論、ソーロウは個人主義者であり、釈尊は社会を相手にする宗教家であるという大きな相違があった。しかし、ソーロウの詩の第2聯は『般若心経』の偈文の方向に傾いているように私には感じられる。彼岸であるアゾレス島に到達して真理を手にしたならばソーロウも覚者たり得たであろう。

ソーロウはインディアンをアメリカの先住民族と見なした。『一週間』の第

1章“Concord River”では、ソーロウの常套手段であるが、巻頭詩として他人の作品をのせている。ここではエマスの詩を引用している。(エマスの詩は第7章“Thursday”にも巻頭詩として引用されている。)第1章はコンコード河についての説明である。白人到着(1635)以前のコンコード河とその周辺にソーロウは注目した。インディアンはこの河をマスケタキッド河(Musketakid=Grass-grown River)と呼んでいた。ソーロウは「草生い茂り、河流るる限り、これはマスケタキッドである。人間が岸辺で平和な生活を送る短い間だけがコンコードである」と言った。詩的なマスケタキッドという名は永遠性をもつという意味で、インディアンが条約文に使った「草生い茂り、河流るる限り」という言葉を具体化しているとソーロウは考えた。自然を描く時のソーロウの理想の要約がこの文句である。彼は河の調査から書きはじめた。

第2章「土曜日」(8月31日)にはインディアンの歴史と白人到来が書かれているが、この章の大部分は魚に関する調査で埋められている。マスケタキッド河には多くの種類の魚が住んでいて、ダム完成以前にはインディアンも初期の白人移住者も豊漁を楽しんでいた。何千年か後には大自然がダムを崩壊して魚もインディアンもここに帰ってくるだろうとソーロウは想像した。

第3章「日曜日」の主題はインディアンと白人との間の宗教上の衝突である。ソーロウは両者の長所をあげている。白人は知的常識人で従順である。愚者でも有能で、愚図でも根気がある。労働者は娯楽と運動を軽蔑して頑丈な木造家屋を建てる。こういう白人はインディアンの狩猟地を略奪し、河の周辺に英語をばらまいてニュー・イングランドにってしまったとソーロウは言った。他方、インディアンは森の神と霊交し、自然と語ることを許されている。自然は詩人が歌ったよりも遙かに野性的である。もし、インディアンの詩を聞くことができれば、彼等が野蛮と文明を交換しない理由が分かるであろうし、インディアン社会は自然のなかにあり、白人社会はサロンのなかにあるとソーロウは考えた。野性は力強く町を活気づけるとソーロウは語った。この考え方が都市文学よりも粗野で力強い神話や古典に対する彼の賞賛の原点である。ここにも修験道の行者的ソーロウの感覚が見られる。前鬼後鬼を従える超人「役小角」は魔術師を従える酋長を思わせる。ソーロウが引用しているワナランセット

(Wannalancet) のピューリタニズム改宗談はかなり信用できる。古いカヌーは滅亡へ向かうが、新しいカヌーは災難に遭遇しても永遠の安らぎへ向かうと宣教師がワナランセットに教えたのである。しかし、ソーロウはワナランセットの自然宗教こそ恵み深く、尊大で利己的なピューリタンの教えが彼等の道を誤らせたのだとピューリタンを非難した。ソーロウが旅行している土地は古戦場で狩猟場であったが、今日では祈禱と信仰の戦場になっていると彼は苦々しくつぶやいた。「日曜日」の章の終りの部分でソーロウは有名なフィリップ王戦争⁶⁹の勇士であった老移民ジョナサン・ティング (Jonathan Tyng) のことを回想している。ティングは奮戦の褒賞としてメリマック河のウィカサック島を与えられた。1694年にマサチューセッツ州議会は「インディアンを恐れて町を捨てた移民の権利を没収する」という法律を可決した。このために、真実と正義に溢れる辺境が絶えず見捨てられているとソーロウは嘆いた。

第4章「月曜日」ではインディアンと白人の戦闘が取り上げられている。しかし、最大のフィリップ王戦争には触れず、小さなファーウェル戦闘 (1724) とラブウェル戦闘 (1725) だけを取り上げて、両者にすべての戦闘が代表されているとソーロウ独特の類推をしている。彼は両小戦闘を象徴的、典型的なものとして正確に書こうと努力したが、十分な記録によらず主観的に自分の意見を述べたにすぎなかったから、記録としての価値はない。古歌によるとラブウェルの戦闘では34人のイギリス兵が約80人のインディアンを打破したことになっている。ソーロウはイギリス兵の死傷者のことを書いてからインディアンの負傷者が2週間も荒野で生きるためにはどうしたかということを書き加えた。話と実際の戦闘との相違点を重視したかったのであり、さらに、白人側の記録だけが残っている点に注目して、歴史とは勝者の記録だということを強調した。この章では改革や東西思想の相違などに関しても書いている。ソーロウは19世紀の改革主義者達に対しては歴史の真相に彼等は無知だから興味をもてないと言った。「ほとんどの社会改革は興味を抱かせるだけの力をもっていない。河が干上がり、松が枯れようとしているならば、私は注意して耳を傾けよう」とソーロウは言った。人間はすべて嘘つきだということを彼は知っていた。少数作家はインディアンの忍耐力、自己否定を強調したが、ソーロウはそ

れにとどまらず、古代叙事詩の英雄とインディアンを結びつけさえもした。「移民はインディアンに対してではなく、森の影と戦っていたのではあるまいか。原始林のなかの水蒸気、熱気、寒気と戦っていたのではあるまいか」とソーロウは書いた。インディアンの戦士も同様に非現実的想像や病魔と戦っていたに違いない。

第5章「火曜日」にはインディアンと白人の通商のことが書かれている。ソーロウは商人ではない。商業に反対のソーロウが『ウォルデン』のなかで、商業を意外に大胆、冷静、現実的、冒険的で飽きないものと書いているが、それは正義の通商だけを念頭に置いていたからである。18世紀のニュー・イングランドでは宗教と戦闘の計画を打ち砕いたものとして毛皮商人のことをあげて、クロムウェルという毛皮商人の話をもソーロウは引用した。そして、インディアンと白人との軍事同盟を結んだのは商業の長所だとソーロウは言った。攻撃してくるモホーク族 (Mohawks) に対して英語で警告できるインディアンの話も書いて、文化の総合は両側から進んでくるとソーロウは言った。

第6章「水曜日」ではインディアンと白人の間の友情の話をもソーロウは書いた。野性社会では友情は文明とかキリスト教とかによって改善できるような美德ではなかった。ソーロウ兄弟は最高の友情は毛皮商人ヘンリー (Alexander Henry) と彼の生命を救ったオジブウェー族 (Ojibwa(y)=a tribe of Algonquian Indians) のワワタム (Wawatam) との間に見られると言った。ワワタムの場合には友情は夢にはじまった。彼は白い兄弟を夢に見た。ミチリマキナック (Michilimachinac) の大虐殺 (1763) でヘンリーと他の捕虜達は殺されそうになった。ヘンリーをはじめて見たワワタムは兄弟分の約束をして彼を隠した。多くの労苦の末、ワワタムの家族と一緒にヘンリーは長い幸福な冬を楽しんだ。これが「ほとんど枯木で葉もないが、花も実もある友情」の話である。白人を助けたインディアンの話は滅多にない。「ある男が友人だということは敵でないということ以上のものではない」のであり、これこそが「自由で責任を要求しない」無償の友情だということである。もし、慈悲と助け合いを気にしはじめたら友情は終りである。ソーロウは友人として「太平洋の水夫に発見されていない美しい耶子の島」というイメージを使った。彼の詩 “The At-

lantides”⁰⁹ のなかで友情を沈んだアトランティス島に譬えている。ワタムの名は後にも出てくる。ソーロウはヘンリーをギリシアのクセノフォン⁰⁹に譬え、その荒削りだが正確な冒険談を国家の原始時代についての偉大な詩であるとまで高く評価した。そして、白人の無知忘恩を強調するために碑文や書物に残る有名人のリストをソーロウは作った。真の愛国者の名は記録には書かれていないとソーロウは言いたかったのである。インディアンは自己信頼の勇敢な狩猟人という美德をもつと同時に残虐狡猾という悪徳をもっていた。彼等は収獲があれば他人に分けるが、収獲がなければ危険で信頼できなかった。兄ジョンに対する追悼文という意味で「水曜日」の章の約6割は友情論に当てられている。『一週間』は出版迄に約7年もかかった。ソーロウ兄弟は自然から遠ざかることは墮落だと感じたからインディアン⁰⁹の伝説と風習に強い愛着を抱いたのであった。

第7章「木曜日」では模倣と芸術についてソーロウは書いた。ここでは自然と芸術の相違、天才と才能の相違について書いている。ゲーテの意見を借用して、「天才とは創造者、靈感者、超人であって探求されていないことについて完璧な作品を書ける者である。芸術家とは天才の作品を観察して、そのなかに法則を発見する人のことである」とソーロウは書いた。この章は雨の朝にはじまっている。「自然界には人間を傷つけるために起るものはなく、地震や雷や嵐でさえも例外ではない」と言ってソーロウは雨を楽しんだ。ソーロウ達は山頂アギオチュック (Agiochook) を目指した。この章のなかで、「完璧な芸術作品はいい意味で野性的で自然である」とソーロウは語った。インディアンに関しては、ある程度まで信頼できる聞き話を紹介しているにすぎない。兄ジョンとワシントン山に登る途中で開拓者の母と呼ばれるハンナ・ダスタン (Hannah Dustan) の話を聞いて、それをこの章のなかでかなり長く書いている。ソーロウが書いた内容は文学者フィードラー (Leslie Fiedler) やスロットキン (Richard Slotkin) の注目を集めたということであるからこれが作り話だとしても一読に価しよう。ソーロウ兄弟はメリマック河畔で露営して満足した。ソーロウにとっては、草生い茂り河流るところで平和に眠ることが自然との本来的な関係のはじまりであった。

最終の第8章「金曜日」には詩とその本来性について書かれている。エマソン達のようにソーロウもアメリカ本来の詩について考えようとしたと思われる。インディアンはアメリカの詩に材料を提供はしたが、詩の形式や内容を提供することなく、彼等は詩人ではないという暗黙の前提が一般にあった。1840年代のオジブエー族の物語の翻訳にもとづくロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow, 1807—82) の「ハイアワサ」(“Hiawatha”, 1855) 出版によって彼等の詩についての研究が問題になった。こういうことを知らなかったソーロウはインディアンは野性的でホーマー風のものに違いないと長く信じていた。身近な事実以外は書物や話から得た知識を想像力で修飾していたソーロウのインディアン論には誤解が多い。

最近、インディアン作家が注目されるようになった。カイオワ族 (Kiwias) のママディ (N. Scott Momaday, 1934—) の『夜明けの家』(*House Made of Dawn*, 1968) は始めてピューリッツァ賞を獲得した。彼の父はカイオワ族の血を、母はチェロキー族の血を引いている。彼はフェメス・プエブロ (Jemez Pueblo) のインディアン居留地で育ち、大学で講義をしながら作品を書いた。彼に続いて次々とインディアン作家が輩出し、現在ではインディアン・コースを置いている大学もあり、インディアンの作品を載せる雑誌もある。しかし、彼等は独自の宗教を信じ、単純素朴すぎるので実際に興味の対象になり得るかどうか疑問である。アメリカ本来の詩を研究するのにソーロウはインディアンに頼ることはできず、自分の僅かな観察によるか、正誤を問わずに他の詩人達の意見から学ばなければならなかった。結局、ソーロウは自分の本質にある神秘的自然に立ち帰った。それは風に鳴る葉音や穀物や葡萄の房の向う側にあったり、10月の夕陽のなかや空の色のなかにあったりするが、終局的には沈黙のなかにあった。沈黙は古典的、野性的であって、インディアンの姿が想像のなかに浮かんでくるのであった。インディアンに思いを馳せる時にソーロウは孤独で瞑想に耽るのであった。これが彼にとっては最も楽しい遊びであった。自然界は彼に遊び方を教えてくれた。錫杖を振って修業することは行者にとっては最大の楽しみであろう。ソーロウを修験道の行者に比較できる点がここにあると私は思う。

註

- (1) Bradford Torrey and Francis H. Allen, eds: *The Journal of Henry David Thoreau*, Vol. 1, Gibbs M. Smith, Inc., Peregrine Smith Books, Salt Lake City, 1984, pp. 444—46. (This and the succeeding paragraphs on the Indian were written in pencil on loose sheets of paper and slipped between the pages of the Journal.)
- (2) Thomas Harriot, 1560—1621: *A Briefe and True Report of the New Found Land of Virginia*, 1590, ハリオットはイギリスの数学者で測量のために Sir Walter Raleigh によってヴァージニアへ派遣され紀行文を書いた。
- (3) Thomas Morton: *New English Canaan*, 1637, モートンはイギリスの冒険家でアメリカを探險し、本書をオランダで印刷出版した。皮肉に溢れ偏見的で信用できないと言われる。
- (4) George Henry Loskiel (a clergyman of Moravian Churches): *History of the Mission of the United Brethren among the Indians in North America*, The Brethren's Society London, 1794.
- (5) Alexander Mackenzie, 1764—1820: *Voyage from Montreal...to the Frozen and Pacific Oceans*, 1801.
- (6) *The Journal of Henry David Thoreau*, Vol. 4, pp. 415—16.
- (7) *Ibid.*, Vol. 6, pp. 31—32.
- (8) *Ibid.*, Vol. 10, pp. 251—52.
- (9) Carl F. Hovde, William L. Howarth and Elizabeth Hall Witherell, eds.: *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, Princeton U. P., 1983, p. 3.
- (10) King Philip's War は 1675. 6. 20. に勃発したインディアン 5 部族と植民地人の間の戦争で Philip が射殺されて 1676. 8. 12. に終結した。
- (11) アトラスの 7 星ブレアディス (スバル星座) のことで、アトランティス島はジブラルタル海峡西方の大西洋上にあったとプラトンが言った楽土で、神罰を受けて一昼夜で沈んだと言われる大きな島のことである。
- (12) Xenophon 434?—355? B. C., ギリシアの歴史家、哲学者、将軍。